あかりの物語❻

行灯（あんどん）

行灯の“行”という字には、“持ち運ぶ”や“携帯する”という意味があります。つまり、必要に合わせて移動させることのできる照明器具として屋内外で用いられました。その後、屋外ではより持ち運びに便利な提灯が使われ、行灯はほとんど屋内専用の道具になりました。行灯の形は丸や四角など様々で、中に入れるのも、ろうそくの場合と灯明の場合があります。
一方、燭台はろうそくをそのまま台に立てて使いますが、行灯には和紙が張られているため、柔らかい光が周りを照らします。

［あかりの豆知識］今夜の月はどんな形？ー明るさを変えられる行灯

有明行灯は寝室の常夜灯で、枕元に置きました。二重の箱になっており、外箱には満月や三日月のあかり窓が開けられており、満月でまぶしい時は三日月に変えることで光量を調節することができます。
　灯明やろうそくのあかりは今の豆電球より少し明るい程度ですが、それでも当時の人にはまぶしく感じられたようです。

丸型行灯は和紙を張った部分がスライドして、全周和紙でおおえるようになっています。本を読むとき、針仕事をするときなどは、おおいを外して灯心の火が直接照らすようにします。
それでも現代のあかりと比べるとかなり暗いのですが、よく昔ばなしで出てくる「夜なべをして・・・」というシーンは、こういったあかりの中で作業していたことになります。